



コロナ下、外出自粛や休業要請、酒類禁止のなか開かれた東京五輪。各界の方がそれぞれの考えを述べ、数々の指摘をする。国民ひとり一人の思いと、どう整合するでしょうか。

全12回—2021年8月10日～23日

その1 ①～⑥ から続く

その2 ⑦～⑫ **語る東京五輪⑦**

2021年8月18日

限界が露見した人新世の五輪



齋藤幸平さんが求める転換

さいとう・こうへい 1987年生まれ、大阪市立大学大学院経済学研究科准教授。専門は経済思想、社会思想。『人新世の「資本論」』で新書大賞2021を受賞。

東京オリンピックが閉幕した。期間中に都内では新型コロナウイルスの「爆発的感染

拡大」が進行するなど、多くの問題が相次いだ異例の大会は、今後の五輪にどのような教訓と課題を残したのか。資本主義の限界を説いた『人新世の「資本論」』で話題の経済思想家・齋藤幸平さんに聞いた。

透けた五輪の本質

—東京五輪をどのように見ましたか。

コロナ禍で無観客での開催となり、盛り上がりには欠けてしまったよね。そのため、コロナが原因で五輪は成功しなかったという総括になりがちです。ですが、それでは問題の本質が見えなくなります。いちばんの問題点は、資本主義が**五輪を金もうけの道具に**してきたことです。

—どういうことでしょうか。

米国の政治学者ジュールズ・ボイコフは、五輪のようなメガイベントの本質を「**祝賀資本主義**」と批判しました。人々がお祭り騒ぎをしているのに便乗して、政府や開催都市の大型支出によって特定の企業だけが利益をむさぼり、その分のツケを国民に押しつけるというものです。

選手への期待やゲームの感動で、本当の問題を覆い隠すことを**スポーツウォッシング**ともいいますが、「選手が頑張っているんだからつべこべ言うな」という**同調圧力**も、スポーツウォッシングの一種でしょう。

しかし、今回の五輪は、コロナの感染爆発のせいでスポーツウォッシングの効果があまり発揮されず、祝賀資本主義の舞台裏が透けてみえるようになりました。こんなにコロナの状況が悪いのに

強行開催されて、「やはり利権なんだな」と一般の人も気づいたし、自粛営業を強いられる飲食店も「なぜ自分たちだけが五輪のために犠牲を強いられるのか」と反発した。

スポンサー企業までもがイメージ悪化を恐れて、CMを取りやめるところまでできました。



コロナ禍で世論が分断された中、東京五輪が幕を閉じました。識者は今、どう考えているのでしょうか。寄稿やインタビューでお伝えする連載です。

——1984年のロサンゼルス五輪が商業五輪の原点と言われますが、今回は商業化の果てということですか。

そうです。商業化を「祝賀」=スポーツの感動で覆い隠そうとしたのに、**得をする人と損をする人の分断**が、くっきりと見えてしまったのが今回の東京五輪でした。分断を深めたという点については、本来の五輪の理念からみて失敗だったわけですが、祝賀資本主義という点でも、最後に楽屋裏が透けて見えたという意味で失敗だったと思います。

ただ、開催準備の段階では、祝賀資本主義は、今回も所定の目的を達したように思えます。そのひとつが、**五輪なくしては不可能だった神宮外苑地区の再開発**です。

国立競技場のすぐ南側にあった都営霞ヶ丘アパート(下)=2014年5月

私物化される「コモン」

国立競技場周辺は、かつては公園や公営住宅など、「みんなのための」公共スペースの多いエリアでした。しかし、**競技場の建て替えに便乗**して、公園をつぶし、公営住宅を壊し、住民を強制的に転居させました。そして計画が白紙になったザハ・ハディド氏（故人）のデザイン案の国立競技場のサイズにあわせて、建物の高さ制限を80メートルに緩和し、高層ビルやタワーマンションの建設を可能にしました。



今後も建設ラッシュが続くでしょう。東京・晴海などの湾岸地帯についても同様です。これは五輪のための開発でなくて、**開発のための五輪**だったといえるのではないのでしょうか。

東京五輪選手村がある晴海エリア。奥にタワーマンションが並ぶ=2020年6月27日、東京都中央区、朝日新聞社ヘリから、北村玲奈撮影

——開発する余地が限られた成熟都市で、新たに開発できる場所=「フロンティア」を造っていくということですか。

公園をなくして開発できるようになれば、そこにフロンティアができ、15メートルだった規制を80メートルにしたら65メートル分のフロンティアができるというわけです。「五輪のため」という錦の御旗があれば、市民もメディアもそのような開発に反対しづらい。祝賀資本主義ならではの都市開発のやり方です。

みんなが自由にくつろぐことのできる公園や景観は、公共財=「コモン」です。生きていくのに保障されるべき住宅を提供する公営住宅も「コモン」と言えます。

資本主義は、もともとこの公共財「コモン」を私物化していくプロセスだともいえるのですが、公営住宅や公園を廃止したり、高さ制限を緩和したりした神宮外苑エリアで起きたことは、まさにそのプロセスでした。資本主義には、新しい土地を開発して膨張したいという衝動が備わっているのです。これは東京五輪だけの問題ではなく、**メガイベントに伴う本質的な問題**です。

2025年の大阪・関西万博でも、「五輪はコロナで失敗したから、万博こそは」と、日雇い労働者の街として知られる大阪市西成区の「あいりん地区」などを開発しようということにでもなれば、同じようなことが暴力的な形で繰り返されることになります。

——祝賀資本主義が加速すると格差が生まれるということですか。

利権をもつ人だけが豊かになっていきますよね。資本主義がそもそもそういうものですから。海外で、招致レースの最中に市民が利権構造に気が付いて招致反対の運動をするケースも増え、立候補する都市も激減しています。多くの人が**今の形での五輪は持続可能でない**ことに気づいている。

商業化進んだ五輪の「報い」

——五輪はもはや持続可能ではないということでしょうか。

はい。商業化が進んだ揚げ句に、資本主義のもつ問題点を内包したイベントになってしまったからです。



そもそも資本主義自体が、持続可能なシステムではありません。利潤をあげられるフロンティアを見つけては食いつぶしていくような仕組みです。『人新世の「資本論」』でも警鐘を鳴らしたことですが、利潤のための開発が世界全体を覆った結果、修復が非常に難しい環境危機を引き起こしています。

斎藤幸平さん=2021年7月、大阪市住吉区、田部愛撮影

このふたつのポイントから見ても、五輪の持続不可能性が非常にクリアになります。

まず、開催都市の市民に過剰な負担を押しつけ、世界各国の都市を食いつぶすようにしながら開催を続けようとしても、都市は無限にあるわけではありません。先ほども述べたように、反対運動も巻き起こり、立候補都市も減っています。「資本の利益のための五輪」「開発のための五輪」という祝賀資本主義的な五輪は、限界に達していて、持続可能ではありません。

女子個人総合決勝を客席から見つめる米国のシモン・パイルス=2021年7月29日、有明体操競技場、細川卓撮影

また「人新世」とも呼ばれるほど、人間の手が引き起こした環境危機がひどいこの時代に、「使い捨て」の多い五輪のような短期間のメガイベントを正当化できるのかという問題もあ



ります。五輪以降はほとんど使用されない大型施設から、大量廃棄される弁当にいたるまで、**環境負荷のオンパレード**です。

ゼネコンや弁当業者などかかわった企業は「使い捨て」でも五輪によって潤い、かつてはそれを「経済効果」「経済成長」と呼んで喜んでいたのですが、「人新世」の時代においては、それは環境破壊でしかありません。

こうした**経済成長を陰の目的とした五輪によって、選手やスポーツそのものが「報い」を受ける**ようになっています。気候変動の気温上昇で、マラソンや競歩は選手の身体生命を脅かすほどになっています。冬季スポーツは、降雪量が不足するため、五輪の開催も困難になるし、競技人口も減っていくことになるでしょう。

国の威信やスポンサー企業のための競争が過剰になることで、**トップレベルの選手たちも消費され、疲弊**しています。スポーツの競争主義・消費主義に対して、大坂なおみ選手は全仏オープンテニスの記者会見をキャンセルし、米体操女子のシモン・バイルス選手は心の健康を優先して、個人総合などを棄権しました。ここで希望があるとしたら、競争から降りた彼女たちの行動を称賛する声があがったことです。**スポーツのあり方の変化を皆が求めている**のです。

スポーツを脱成長型モデルに

ですから、資本主義が行きつくところまできた「人新世」の時代においては、五輪やスポーツの目的や理念を「成長」から「脱成長」に切り替えなくてはなりません。スポーツを利潤獲得の道具にするのではなく、**みんなのための公共財「コモン」としてのスポーツ**に立ち戻るべきなのです。——「スポーツをコモン化する」とは。

スポーツから他者への尊重やフェアネスの精神を学び、対話や協調を体現するスピリットを取り戻し、スポーツを民主化するということです。**スポンサーや勝利を優先するモデルから脱却**することが、スポーツを持続可能とするために重要になってきます。

五輪は「参加することに意義がある」という精神を大切にしてきたはずですが、商業化できれいごとをなぞるだけのものになり、勝つこと、世界記録を出すことこそが優先される不健全な構図になっています。トップ選手たちが必死に競う場そのものを否定しているわけではなく、**いろんな人が気軽にスポーツに参加できるような環境整備にもっとお金を使うべきだ**と思います。

公園をつぶして五輪をやったら、人々がジョギングするところを奪っているわけで、逆に五輪をきっかけに公園を整備するなどスポーツを民主化しないといけない。プロスポーツもお金を選手の待遇だけにつぎ込むのではなく、スポーツ環境の整備に使うような社会になっていくべきです。今のビジネスモデルに制限をかけることが脱成長の考え方で、金の配分などで見直す段階にきていると思います。

——脱成長が必要なのは社会もスポーツも同じと。

スポーツの勝利至上主義的なモデルと資本主義は、親和性があります。相手を打ち負かす痛快なストーリー、成功すると多額の年俵がもらえるモデルは資本主義的です。スポーツの暴力性が資本主義の暴力性と結びついて、暴力は暴走し、弱者・敗者が排除されていきます。

女子パーク決勝で、最後の犬技が決まらず 4 位が確定した岡本碧優を他の選手たちが担ぎ上げた=2021 年 8 月 4 日、有明アバンスポーツパーク、北村玲奈撮影

スポーツを脱成長させると同時に、人々がもっと余裕をもって社会に参加できる仕組みに転換することを、セットでやっていく必要がある。現在のスポーツは勝利至上主義のもとで、資本主義の象徴的な存在になっているので、五輪を含めた祝賀イベントを**脱成長型のモデルに転換**していくことは、社会全体にとっても大きな意味があると思います。

——モデルを転換することは可能でしょうか。

勝ち負けにこだわるのではなく「良いゲームが見られたらいい



「いじゃないか」と思う人を増やすこと

はできると思います。冷戦の時のような国の威信をかけて戦うモデルは古臭い。

東京五輪からの新競技スケートボードでは、その部分が垣間見えました。選手から好きな選手の名前が挙がり、記者が「どこの国の選手か」と聞くと「知らない」と。選手個人を尊敬しているだけであって、その選手がどこの国の選手なのかは関係なく、フラットなコミュニティーの中でかっこよさを競っているというモデルになっている。

今までと違うスポーツや新しい世代が出てくると、今後、商業主義的なモデルも変わっていくのではないかと思います。
(聞き手・片田貴也)

朝日新聞
DIGITAL TOKYO 2020

語る東京五輪⑧

2021年8月19日

「反対→ゴリ押し→あきらめ」の 流れ止めろ

ジャーナリスト 今井一さん



いまい・はじめ 1954年、大阪市生まれ。ジャーナリスト。市民団体「国民投票／住民投票」情報室の事務局長を務める。国内外の住民投票を取材し、著書に「住民投票の総て」がある。

閉幕した東京オリンピック（五輪）。新型コロナウイルスの感染拡大で中止や延期を求める世論が高まったが、政府は開催に突き進んだ。「民意」と離れた意思決定がなされたのはなぜなのか。市民自治や住民投票に詳しいジャーナリストの今井一さん（67）は「日本の悪弊が続いている証し」と言う。

票に詳しいジャーナリストの今井一さん（67）は「日本の悪弊が続いている証し」と言う。

——今回の五輪が残したものは何ですか。

相も変わらず、時間や税金、労力といった国民に様々な負担をかける国家的事業が、国民の意思に関係なく、一部の利害関係者だけで決められ、しかもその責任を誰も取らない。この五輪は「コロナに打ち勝った証し」ではなく、「日本の悪弊が続いていることの証し」を示している、と思います。

国会前のデモが盛り上がった安保法制の時や福島原発事故後にみられた、「反対」→「ゴリ押し」→「あきらめ」→「納得」のサイクルが、極めて分かりやすいかたちで今回も起きたことが印象的でした。戦後76年の間、日本で繰り返されてきた光景です。

——どういうことですか。

五輪の開幕前、コロナの感染拡大で、各社の調査で延期や中止を求める世論が6～7割に上りました。しかし、主催者は後戻りすることなく開催を強行しました。その結果、次第に反対の世論は薄まっていきました。閉幕後の一部の世論調査では、一転して6割以上が「やってよかった」となりました。

主催者側には「いざやっしまえば盛り上がる」との思惑があったから、反対の世論を無視してゴリ押しできたわけです。終わってしまえば、野党側が五輪開催の正当性について追及したとしても、与党側は「結果的に世論が支持してくれている」とかわすだけでしょう。

これでは政治に緊張感が生まれるわけがありません。「反対」→「ゴリ押し」→「あきらめ」→

「納得」の繰り返しに終止符を打つべきです。

IOCが恐れた住民投票 東京五輪の是非、問えなかった理由 記事の後半では、住民投票という手段について語ります。実は、世界各地の五輪の開催・招致都市で住民投票が行われ、撤退が相次いでいます。なぜ、東京五輪では開催の是非が住民投票で問われなかったのでしょうか。

——どうすればよかったのでしょうか。

人々が「反対」の声を上げるだけでは、こうした悪弊は改まりません。**異議申し立てができる有効な制度**を国民が持つておくことが不可欠です。

そして、「やってよかった」「悪かった」と開催の是非について議論するのは別に、重要な案件については、**主権者である国民が最終決定者になるべきだ**との考えを共有すべきです。

東京、埼玉、千葉、神奈川での住民投票

例えば、東京都と埼玉、千葉、神奈川の3県を対象に、五輪の開催について住民投票をすることができたのではないのでしょうか。住民投票については、住民が直接請求しても、その8割以上が議会によって拒まれてきました。ただ、**一定数の署名が集まれば実施を議会や首長が拒否できない制度**が存在します。広島市や大阪府豊中市、千葉県我孫子市など80超の自治体にあります。こうした制度の存在が、行政や議会側の横暴の抑止力になり、政治に緊張感を生み、世論との妥協案を探る動きにつながっています。

——住民投票で開催の是非を決めるのは現実的でしょうか。

実は、現在のIOC副会長のジョン・コーツ氏が2019年当時、各都市が招致に名乗りをあげる場合、「事前に住民投票を行い、住民に了解を得たうえで立候補してほしい」と要請しています。

——なぜですか。

立候補して開催が決まったのに、あるいは招致レースに参加しているのに、住民投票の結果などで開催を断念する都市が次々と現れたからです。

アメリカのデンバー、ドイツのハンブルクとミュンヘン、スイスのダボス、シオン、カナダのカルガリーなどでは住民投票が行われ、いずれも開催、招致の賛成派が敗れました。IOCは、住民投票のハードルを越えられずに撤退するのを懸念しています。

世界各地で住民投票、開催・招致派が敗れる

——日本では今回の五輪で住民投票の動きが見られなかったのはなぜですか。

ドイツの都市ハンブルクで五輪開催の是非を問う住民投票が行われた際、反対派の市民が街頭で張り出したポスター
=2015年、今井一さん提供

国内外の住民投票の歴史や実施した事例への理解が薄かった

ことが要因だと思います。条例に基づく住民投票は、あまり知られていませんが、実は我々が確認しただけでも427件も行われています。しかし東京都では小平市の1件。23区内ではゼロ。今回も住民投票を求める動きが都民の中から生まれませんでした。

全国で実施された住民投票のうち、署名活動からでなく、首長が提案したものが半数以上です。市町村合併など住民にとっての重大事が対象です。

五輪も同じ重大事です。都知事にその発想はありませんでした。知事や議会からの実施提案がなされてしかるべきでした。



市民は愚かでない 投票に向け学び話し合う

——住民に五輪開催の是非を決められるのか、との批判もあります。

「市民は感情的で冷静な判断ができない」と言う人がいますが、日本で実施されてきた住民投票をつぶさに知れば、市民は決して愚かではないとわかります。逆に、今回の五輪もそうですが、一部の利害関係者だけで重大な意思決定がなされてはいないのでしょうか。政治家は自らの権限が脅かされるのを恐れ、市民自治を軽んじているように見えます。

五輪は関心が高く、話しやすいテーマです。今回も開催をめぐり、喫茶店から SNS 上まで様々な場で議論が起きていました。住民投票の機会ができれば、税金の無駄遣いや社会的弱者へのしわ寄せにつながらないか、より学び話し合うようになります。

「東京五輪は、民意に関係なく一部の利害関係者で物事が決まる日本の悪弊を示した」と語るジャーナリストの今井一さん
=2021 年 8 月 10 日、大阪市天王寺区、矢島大輔撮影



さらに語弊を恐れずに言うなら、衆愚になる可能性があるとしても、最終的には首長や議会ではなく、主権者である市民が決めるべきです。納得したうえで、自らの決定をデメリットも含めて受け入れるのが、本当の市民自治です。

——「選挙で審判を下せばよい」との考え方もあります。

日本では民意を示す機会を選挙だけに限定してしまいがちです。政治家を決める選挙とは別に、直接的に民意を示す回路が必要ではないのでしょうか。政治参加や行政監視をするうえで、この両輪は不可欠だと考えます。今回の五輪のようなことを繰り返さないために、30 年の冬季五輪招致をめざす札幌市で、住民投票を検討してはどうでしょうか。北海道ではすでに 27 件もの住民投票を実施した経験があります。

自治体が独自に条例をつくるだけでなく、国も一定数の署名が集まれば議会が拒否できない住民投票法を制定し、より活用できる環境を整えるべきです。次の総選挙で公約に掲げるような政党や政治家が現れることを期待しています。
(聞き手・矢島大輔)

朝日新聞
DIGITAL TOKYO 2020

語る東京五輪⑨

2021 年 8 月 20 日

無難な「多様性」 外面だけ

ドラッグクイーン レイチェル・ダムールさん



新宿 2 丁目を中心に活躍するドラッグクイーンで、自身はゲイ男性のレイチェル・ダムールさん。「多様性と調和」をテーマに掲げた東京五輪に何を思うのでしょうか。

ドラッグクイーン。1968 年東京出身。90 年代初頭から東京を拠点に、クラブイベントやパーティー、アーティストのライブやミュージックビデオなどで幅広く活動。今年 7 月には、開会式で MISIA さんが着たドレスを手がけたブラ

ンド「トモ・コイズミ」のショーでモデルを務めた。

オリンピックには興味がなくて、競技も開閉会式もほぼ見てない。ただ、MISIA さんがレインボーカラーのドレスを着た国歌独唱だけはツイッターで知って、見ておこうと思った。

彼女とは 20 年前に初めて会って、ツアーや 2019 年の NHK 紅白歌合戦に他のドラァグクイーンたちと一緒に参加した。才能あるアーティストで、セクシュアルマイノリティーの権利や差別についても積極的に活動してきた人。だから今回も、誰かがやんなきゃいけない役割を、とりあえず引き受けざるを得なかったように見えた。

レインボーが独り歩き

ドレスは、まあ、無難な落としどころかなと思った。開会式に限らず、最近ではセクシュアルマイノリティーの象徴としてのレインボーが独り歩きしている。誰かの責任に基づく明確なメッセージ



ではなく、ある意味どうとでも取れるイメージを発信すれば、周りが「多様性」と受け止める。その意味を知らない人には違和感を与えず排除されないようにするという、戦略でもあるだろうけど。

レイチェル・ダムールさん。国内最大級のセクシュアルマイノリティーのイベント「東京レインボープライド」で=本人提供

レインボーの可視化という意味では価値があったと思う。でも、そのバトンを受け取った自分たちがどう行動するか議論なしに「素晴らしかった」とは絶対言いたくない。同性婚もできない、

家父長制的な家族観が根強い今の日本で、お題目を唱えても外面が良いだけ。大会公式マスコットのミライトワとソメイティも、強烈に「男」「女」のジェンダーを感じさせるデザインだったし。

日本人って、新しくできた言葉を使うことで安心しがち。「ドラァグクイーン・ストーリー・アワー」という子供のための読み聞かせイベントに参加しているけど、最近では「多様性」「SDGs」を強調した似たような絵本がすごく多いと感じる。私は、なるべくそうじゃない本を探している。意識の高さをアピールするより、他者に敬意をもって優しくできるかどうかの方が大事だと思うから。「多様性」という言葉を使わず多様性を体現するにはどうすべきか、考えた方がいい。

ムキになって応援、なぜ

東京開催が決まった時、正直うざいと思った。新宿 2 丁目を中心にアングラ系の仕事もしている自分の日常が、かき乱されるのが目に見えていた。インバウンドを見越して街の「浄化」が始まり、



風俗業や公序良俗に反するとされるものへの弾圧が始まるだろうと。結局、コロナ関連に問題が集中し、海外客も来ず、予想は外れたけど。

レイチェル・ダムールさん。新国立競技場前のモニュメントとともに=本人提供

ただ、コロナがなければここまで五輪に否定的な気持ちにはならなかったかも。国民を守ることに注力すべき時に、感染対策の詰めも甘いまま強行した。五輪はあくまで祝祭で、終われば日常が戻ってくる。ハレの場はケを守るためにあるはずなのに、あまりにも日常へのしわ

寄せが大きすぎて本末転倒だった。

レイチェル・ダムールさん。腕には大会公式マスコットのミライトワとソメイティ=本人提供

ところが、周囲には「選手は頑張ってる」と、ムキになって応援しているように見える人も少なくなかった。なぜそんなに五輪に自分のアイデンティティを重ねられるのか不思議。今はみんな不安定だから、一つのよりどころとしてすぎるしかなかったのかな。

開催するべきではなかったと自分は思う。でも、真っ向から反対と言いつつ切れたわけでもなく、やるならやるで何か他のやり方があるんじゃないかと考え続けていた。なんで私が五輪のためにこんなに精神を乱されなきゃいけないのか、蹂躪（じゅうりん）されてるような気がした。

五輪が残したもの？ 何も残さず、引っかき回してどっか行っちゃった。もしレガシーがあるとすれば、「結局、国は助けてくれない」という絶望感かな。（構成・田中ぬれ奈）



朝日新聞
DIGITAL TOKYO 2020

語る東京五輪⑩

2021年8月21日

文化見せる機会、日本はいかせず 日本が五輪ですべきだったこと



ジャーナリスト

西村カリンさん

にしむら・かりん 1970年、フランス生まれ。ラジオ・テレビの技術担当を経て来日。2004～20年2月にAFP通信東京特派員。

コロナ禍での五輪開催に揺れた日本社会。東京で取材する海外の特派員は

どう見たのか。次の開催国、フランスのリベラシオン紙とラジオ・フランスの記者で、20年以上にわたり日本を見てきた西村カリンさんに聞いた。

——異例の形で開催された五輪を、どのように取材しましたか

スポーツの取材は専門性のある記者が派遣されたので、私はメインプレスセンターや競技場、空港の感染対策について、国際オリンピック委員会（IOC）に取材しました。いつもの五輪であれば、倍くらいの人数の記者が来て、開催国の文化や社会のことも発信するのですが、彼らは外での取材が不可能でした。結果的にコロナの感染状況とスポーツばかりが報道されることになりました。

——「復興五輪」について開会式などで発信がなく、ほとんど報じられませんでした

私は東北の方を取材するため、聖火リレーの際は福島県へ行きましたが、普段日本のことを取材しない記者は復興五輪のことを知らなかったでしょう。スポーツの面ではア

スリートが頑張って成功した面もあると思います。ただ今回残念だったのは、それ以外の日本の良いところが報道されず、一連の不祥事など悪いところばかりが目立ってしまったことです。もっと理想的な環境になってから開催すべきでした。



東京五輪の報道拠点「メインプレスセンター」
=2021年7月20日午後1時41分、東京都江東区、諫山卓弥撮影

五輪は本来、世界にその国の文化を見せる良い機会です。パリはまさにそれをめざしています。パリ市長がセーヌ川で開会式をやるとか、ベルサイユ宮殿で競技をやるとか話しているのを聞くと、心が痛むんです。彼女が

紹介したことはまさに東京ができなかったことだからです。

コロナ禍で世論が分断された中、東京五輪が幕を閉じました。識者は今、どう考えているのでしょうか。寄稿やインタビューでお伝えする連載です。

—日本はどうすべきだったでしょうか

パンデミックの中でこんなに大きなイベントを実施するのは異常です。しかも、大会組織委員会の武藤敏郎事務総長も東京都の小池百合子知事も中止を検討しなかったと認めています。少なくとも



も、どのような状況なら開催できるか議論し、誰でも理解できるように説明をすべきでした。

パリで8月8日、東京五輪の閉会式を見ようと、エッフェル塔前のパリ五輪のファンゾーンに集まった人々=ロイター

関係者400人以上が感染して「想定内でした」と言われても、そもそもいつ想定をしていたのでしょうか。

私が今、求めているのは検査データを専門家たちに提供し、科学的に分析することです。それをせずに、「東京の感染拡大に影響はなかった」と言う根拠が分かりません。まだパラリンピックがあります。問題があるなら改善をするべきです。

——バイデン米大統領をはじめ、世界からは「五輪は成功」という声も聞こえてきます

日本政府が感染状況を全く気にしていないような発信をしていることが影響していると思います。私たちが医療現場を取材して深刻さを報道しても、世界に伝わらないと感ずることがあります。日本はフランスなどと比べると検査の数が極端に少ないので、陽性者数も少なくて深刻ではないと思われてしまうのです。

フランスのパブリックビューイング（PV）の映像を見たら盛り上がっていました。一方、日本は無観客だから安全の面では全く問題ないと思われがちです。しかし、東京で PV がなくても渋谷や新宿で取材してみると、「五輪をやっているから」と遊んでいる若者がいたり、補助金が遅れているから午後 8 時以降も営業している店があったりしました。今まで日本では見たことのないような、ルールのない光景でした。政府や大会組織委は「誰にも安心・安全な大会」と言いながら、「外に出ないでください」という矛盾したメッセージを出していました。本当は危険な状況でした。——コロナ対応だけでなく、組織委会長の女性蔑視発言や開閉会式の演出担当者の解任は世界でも報道されました

私は日本が好きで、スポーツ以外でも良いところをたくさん報じたかったのですが、今回はなかなか見つかりませんでした。私が来た 20 年前、日本は技術で世界を引っ張る国でした。しかし、今の日本は内向きで外の変化についていけていません。権力者は高齢者が多く、東京五輪にせよ、大阪万博にせよ、1964 年と 1970 年のことをもう一度やろうとしています。菅義偉首相にはもっと外に出て状況をみて、若者や医療関係者と話してほしいと思います。

——フランスの人たちは五輪をどう見ているのでしょうか

東京五輪はスポーツを純粋に楽しんだ人が多いですし、次のパリ五輪を楽しみにしている人も多くいます。引き継ぎ式の映像も自転車 BMX の選手がパリのランドマークの屋根の上を走るなど、フランスの自由さを見せるもので、スポーツのプロモーションの観点からは良かったと思います。

東京都の小池百合子知事（左端）から引き渡された五輪旗を手にするパリのアンヌ・イダルゴ市長。中央は IOC のトーマス・バッハ会長=2021 年 8 月 8 日、国立競技場、恵原弘太郎撮影



一方で、社会にとってどうかは分かりません。東京五輪とは関係なく、フランスには反五輪の考えを持つ人たちも多くいます。五輪の度に開催都市がその後たどる状況を見ていますから。日本では、今回の五輪でようやく IOC が取る態度といった問題に気付いた人が多いのではないのでしょうか。

——フランスでは東京五輪・パラリンピックの招致をめぐる贈賄疑惑の捜査も続いています

少し遅すぎますが、同じことが起きないようにしっかり捜査をし、問題があったのなら罰があるべきです。それは独立した第三者の仕事です。日本オリンピック委員会（JOC）が「違法性がなかった」と結論づけた調査もそうですが、日本はその点でグローバルな基準から遅れています。

——今回の東京五輪は何を残したのでしょうか

ポジティブな面としては女性アスリートが多く参加できるようになったことが挙げられます。一方で「パンデミックの中で五輪をやった」という事実は残ります。そして、どのような影響があっ

たかを判断するには時間がかかります。早計に「成功した」と言うのではなく、検討するのに必要なコロナのデータや議論の経過を全て出してほしいと思います。(聞き手・小早川遥平)

語る東京五輪⑪

1 分も見なかった五輪

2021 年 8 月 22 日

かけ声だけの政治に初めての怒り



緊急事態宣言が出ている中で開かれた東京五輪は、新型コロナウイルス感染症の患者を診ている臨床医の目に、どう映ったのでしょうか。医師で作家の夏川草介さん(42)に聞きました。

医師・作家

夏川草介さん

なつかわ・そうすけ 1978 年大阪府生まれ。医

師・作家。長野県の病院に勤務し、新型コロナの患者の治療にあたっている。作家としては 2009 年、「神様のカルテ」でデビュー、シリーズ累計 344 万部。今年 4 月、コロナ診療の最前線を描いた小説「臨床の砦」を出版。

——開催するか、観客を入れるか、直前まで決まらなかった東京五輪をどう見ましたか。

開会式の 3 日ほど前まで、「いつ中止が発表されるのかな」と思っていました。緊急事態宣言が出る中で、まさかやらないだろうと。

開催する気持ちがまったくわからないわけではないんです。大きな経済効果があって、その結果、生活が守られる人がいることは理解しているので。

でも、一番の驚きは、菅義偉首相や小池百合子・東京都知事らが、五輪開催と新型コロナウイルスの感染拡大の関連を否定したこと

です。五輪を開くべきでなかったかどうか、経済の素人である私にはわかりません。しかし、「感染拡大と関係がない」という認識は相当見当外れだという印象を持ちます。

「感染拡大と関係がない」との強弁に驚き

——「関係がある」とお考えなのですね。

「五輪を開催する」というメッセージが与える巨大な影響がまったく考慮されていません。緊急事態宣言と五輪を両立させた結果、人々に緊張感がなくなった。

最も大きい理由とは言いませんが、人出が増えた理由のかなり大きな部分を占めると認識しています。

私が知る限り、「関係がない」と発言をする人々の中に医療の専門家はいないように思います。

「関係がある」という医療者の声に耳を傾けず、あくまで「関係がない」と強弁する人たちがいることに驚きました。

——緊急事態宣言の効果は。

これまでの緊急事態宣言は、一応の効果があり、それなりに感染が収まったと思うんです。今回は、宣言慣れ、変異株（デルタ株）の影響もあるとは思いますが、あまり人が減らなかった。

要因のひとつは、「宣言が出ているのに、スポーツの大会ができるんだったら（外に出ても）い

いんじゃないか」という心理的な影響です。緊張感をぎりぎり保っていた最後のバランスが崩れてしまった、という認識を持っています。

実際、県外に旅行し、戻ってから陽性が判明した患者さんを多く診ています。彼らの中には、「五輪が開かれてるんで、旅行くらい、いいかと思った」とわざわざ口にする人もいます。良心の呵責



(かしやく) もあるのでしょうが、五輪はちょうどいい口実になっていると感じます。

救急車で運ばれる新型コロナウイルス感染症の患者=2021年8月3日午前10時35分、千葉市中央区の千葉大学病院、熊井洋美撮影

——競技はご覧になりましたか。

あくまで私個人の話ですが、テレビ観戦した時間はゼロ。開会式も含めて1分も見えていないです。医局のテレビはしばしば五輪中継が流れていましたが、見る余裕のある医師

は少なかったと思います。五輪の感動や、スポーツの力というのは少なくとも私のもとには届いていないようです。

——この五輪は何を残したと思いますか。

経済効果は大事でしょうし、成功させるため大勢の努力もあった。無意味だったとは思いませんが、これだけの新規感染者を出すまで強行して、それに釣り合うものが手に入ったのでしょうか。

政治的な判断として開催はやむを得ないとして、疑問に思うのが計画の立て方や進め方です。大きな問題に立ち向かうときは普通、最悪の状況を想定し、対策を立てるものです。例えば我々の内視鏡処置もそうですが、「処置が1時間を超えたら撤退を考えよう」「血圧がどの程度下がったら中止」と常に具体的な対策を想定して治療に臨みます。政治も同じだと思うんです。

「1日〇〇人までの新規感染者数であれば、開催する利益の方が大きい」「最悪の場合、重症者は〇〇人までを想定している」「感染者〇〇人以上なら五輪後でもパラリンピックは中止する」とか、判断の基準やフローチャートを提示すべきだと思うのです。

けれど、これほどの感染拡大の中でも、政府や政治家からはただ、「危機感をもっています」とか「遺憾に思います」とか、我々の感想と変わらないことが発信されるだけで、何も対策が伝わってこない。それがいつそう医療関係者の疲弊感を生んでいます。

「遺憾に思う」のは現場の医師のほう。トップはいまさら遺憾に思う暇はないのです。何をするか、どう対処していくつもりなのか示してほしい。かけ声やパフォーマンスはやめて、行動してくれることを願っています。

——なぜ「基準」が示せないと思いますか。

責任問題や批判を恐れて、言質を取られないことに必死になっているのかもしれませんが。

しかしそれはプロフェッショナルの態度ではないでしょう。我々も治療がうまくいかないときには、問題点や対処法を具体的に患者さんに説明します。

根拠もなく楽観的になったり、責任の所在をあいまいにしたりせずに、「最悪のシナリオ」を想定して行動するのが「大人の仕事」ではないかと思います。

すみません、愚痴っぽくなってしまって。私が働く長野県でも「第3波」を超える発熱外来の患者数で、少し気が立っているのかもしれませんが。

——スタッフの皆さんとコロナの闘いはまだ続くのですよね。

昨年2月から1年半。さすがに疲れてきています。よく耐えていると思いますが、感染症病棟の看護師たちはそろそろ厳しいです。スタッフに対しては、県外へ出る場合は理由も明確にし、レジャー関係で出るのはダメだというお達しが出ています。

どうしても必要な帰省はOKだがレジャーで動くのはNG。こっそり隠れて行く人も結構いるんじゃないかなと思ったのですが、思いのほかみんな耐えている。夏休みに、家族でキャンプに行く予定を立てていた医師もいましたが、県外からの旅行者があまりに多いことを知ってキャンセルしていました。

首都圏に娘さんがいる医師は「帰省するな」と娘さんを説得するのがとてもつらかったと。医療現場はそうなのに、患者さんの行動履歴を聞いてみると、「帰省して飲み会があった」「〇〇温泉に行ってきた」「五輪やってるし、僕らもいいじゃないか」と言う。精神面でも、そろそろ限界が

近づいている気がしますね。

医療用ガウンやフェースガード、手袋で新型コロナウイルスへの感染を防ぎながら、病室のシーツを替える看護師=2021年8月3日午前9時57分、千葉市中央区、熊井洋美撮影

——政治に何を求めますか。

胸を張って言えるような話ではありませんが、私自身は政治に対する関心は薄いほうです。政治家の失言問題などを耳にしても、「まあ人間ならそういうことも

あるだろうな」ぐらいな受けとめで。

けれどこれだけ危機的な状況の中で、いまだに「大変だ」とか「我慢です」のかけ声だけの政治に対して、初めていただちとほとんど怒りのような感情を覚えています。

政治の世界には、大人がいなくなってしまったのでしょうか。この感染症は、国民の忍耐とか医療現場の努力だけで乗り越えられるものではないと思っています。



夏川草介さん=小学館提供

——今年1、2月の「第3波」の厳しい診療現場を描いた「臨床の砦（とりで）」が出版されて約4カ月。見える景色は変わりましたか。

「第3波」も精神的にきつかったですが、「第5波」でここまで深刻になるとは……。もうちょっと余力を持って戦えると思っていたので。

状態が悪い人を自宅療養にさせるのは、現場にいる人間としたら絶対やりたくないことです。極力病院で引き受けたいんですが、ベッド数に限りがあります。

つらい結末が待っているかもしれないという心の準備はしています。（聞き手・熊井洋美）

朝日新聞

DIGITAL
TOKYO 2020

語る東京五輪⑫ 完

2021年8月23日

ダメなショーだった開会式

世間じゃいいって言うけれど、それ、ホントにいいの？ そんな目線で日常のあれこれを切りとる人。テレビ時評にも定評があるエッセイスト、青木るえかさんは、東京五輪をどう見たのでしょうか。

青木るえかさん

あおき・るえか 1962年、東京都生まれ。「週刊文春」「論座」などに連載をもつ。「定年がやってくる——妻の本音と夫の心得」「主婦でスママセン」「猫の品格」「OSKを見にいけ！」など著書多数。徳島市在住。

——何を残して東京五輪は終わったと思いますか。

今でも心に残るのは開会式かな。内紛とドタバタの揚げ句、典型的な「ダメなショー」を見せていただきました。とにかく目についたのが、構成もパフォーマンスもスカスカだったこと。大人数を使えない制約があったにしろ、うまい演出家なら、広い舞台で少人数でもスカスカ感のない、密度あるショーを作れるんですよ。

コロナ禍で世論が分断された中、東京五輪が幕を閉じました。識者は今、どう考えているのでしょうか。寄稿やインタビューでお伝えする連載です。

私は宝塚歌劇団や OSK 日本歌劇団をよく見てまして「すばらしいショー」も「ダメなショー」も山ほど見ていて、ある意味「ダメなショー」のプロなので、東京五輪の開会式を見始めて5分で、「あ、これはダメなやつだ」とわかりました。

場面ブツ切れ 何を伝えたかった？

開会式でこれを伝えたいというものも感じられず、見た目にパッとせず、場面はブツ切れで、途中でネタ切れしたんじゃないかと気の毒になったほどです。

こんな国威発揚の機会はそうそうあるもんじゃないのにこれだけコケちゃったのを、ナマで見ておいてよかった。録画で見たんじゃ、あの醍醐（だいご）味は味わえなかったでしょう。

——では、どんな開会式だったら？

五輪の開会式なんて、高校野球甲子園大会みたいでいいんですよ。開会宣言と、選手入場と、選手宣誓と、聖火の点火だけ。主役は選手。IOCのバッハさんが短くあいさつして、開会宣言は天皇がして、それだけでいい。でもそれじゃ商売にならないか。

スポーツに罪はない。選手に罪はない。今回の五輪でみなさんおっしゃっていて、私もそう思います。だとしたら、中継番組は競技と選手だけしっかり見せてほしい。

品のある落ち着いた解説を

今回の五輪に限った話ではないですが、五輪の中継番組、スタジオで司会者とゲストが競技を振り返る時間があるでしょう。あれがすごく嫌いなんです。とにかく全員で盛り上げましょう感動しましょう、負けて残念だけど負けても感動、みたいな。中継でも、日本人が出ている競技で、やらギャーギャー騒いだり、用意してきたようなセリフを叫んだりするアナウンサーが出てくるとイヤになります。ああいうのは下品です。淡々とやってほしい。

——今回、どんな競技を見ましたか。

生中継をちゃんと見たのは自転車のトラック競技です。以前から競輪が好きで、日本発祥のケイリン競技で競輪選手が東京五輪のメダルを取るのが、競輪界の悲願だったので。今回、脇本雄太選手と新田祐大選手の登場する場面はテレビの前で正座して見ました。結局、悲願のメダルは取れなかったのですが。

残念でしたが、解説の中野浩一さんはよかった。前から言ってるんですよ、中野浩一は解説者と

して超一級品です。落ち着いていて、競技やレース展開の説明がうまいし、適度に辛辣(しんらつ)、
だけど愛はある。

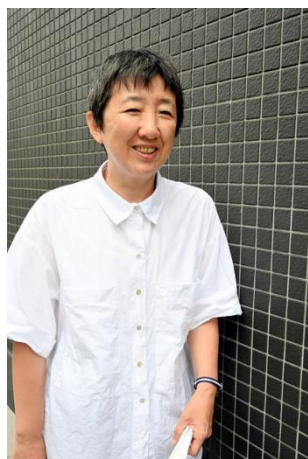
選手の位置取りを見た瞬間、「そこにいたらダメだ！」みたいなことを中野さんが叫んだら、そのあとほんとにダメになる。観客よりはるか先の展開が読めてる。これができる解説者って案外ないんですよ。応援に力が入っても、抑えた声で「行けっ」。下品じゃない。解説とアナウンサーのやりとりは落ち着いた品のいいものであってほしい。ことに、こんな国際大会では。
——心に残ったのは自製のきいた、愛のある解説だったんですね。

地元の徳島市の阿波踊りが、コロナのために去年は中止、今年は分散型の縮小開催になって、最終日の夜、市内の陸上競技場で無観客のグランドフィナーレがありました。私はケーブルテレビで見っていました。

阿波踊り締めくくった眉山の花火

徳島市長が閉会のあいさつをして、「それでは最後に眉山(びざん)のほうをごらん下さい」ってパッと手をさしだしたんです。そうしたら、眉山の山頂から花火が打ち上げられた。うちからもきれいに見えました。徳島市の真ん中にある一番高い山だから、たぶんあの花火は市内のどこからでも見えたんじゃないかな。

ラストに花火なんてお決まりのパターンですし、規模だってたいしたことない。けれど気持ちだけは伝わってきたんですよ。ああ、最後は花火でパーッといこうって、いつものような阿波踊りができないならせめて派手にドンドンパーン！と夜空を飾ろうって。



灯も消えがちな徳島の空に花火があがっているのを見たら、なんかジーンとしたりして。こんな私でも。こんなふうになんか人の気持ちを動かすものが、五輪の開会式や閉会式にはなかったなあと、その時すごく思いました。
——この状況でやはり「感動」という言葉は多く聞かれました。

スケートボード解説の「そっす」が話題になった瀬尻稜(りょう)さん。金メダルがらみだし、あれだけ話題になったんだから、勘違いした人だったら「そっす」をウリにしてバラエティーにも進出してきそうだけど、競技が終わったら静かに自分の世界に帰っていかれました。単に心からスケボーが好きで、いい技が出れば喜び、選手をたたえ、とりつくろわない、いつもの言葉で言っただけ。それが人の心を動かした。

盛り上げたい邪念 心は動かない

見せてやりたいとか、盛り上げたいとか、邪念が入ると、見ているこっちは心が動かないよっていう話です。開会式なんて邪念の最たるもので、一周回っておもしろがってましたが。

ちらっと目に入った瀬尻さんとか、エリミネーションという自転車レース。2周ごとに最後尾が抜けていくという地獄のようなレースを、自転車が走るシャーって音とジャラジャラ鳴る鐘の音をBGMにして見ていた時、理由もなく心は動きました。

近ごろは感動のインフレで、あらゆるところに地雷のように「感動」がひそんでいるし、こっちはそれをよけて歩くのだけで大変です。五輪、それも東京五輪なんて巨大な地雷原だから、近寄らないようにしていましたが、いくつかは確実に、見てよかったものがありました。

(聞き手・河合真美江)

その1 ①～⑥

その2 ⑦～⑫

完

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

(黄色地紋 林 莊祐)